

延宝・天和期の江戸俳壇

— 言水・才丸・芭蕉とそれらの周辺 —

檀 上 正 孝

一 はじめに

池西言水・椎本才丸が、元禄期において芭蕉とあい並ぶ有名な俳人であることは、あらためて申すまでもないであろう。この三人が延宝の末の数年間、同じ江戸俳壇を舞台に、何らかの交渉をもち、新風樹立をめざして活躍するということも、また周知のところであろう。三人の年令は、延宝六年^七に、芭蕉三十五歳、言水二十九歳、才丸二十三歳である。この延宝六年、芭蕉が意欲的な活躍をすることは、後掲の略年譜によっても明らかである。同じ年に、言水も第一撰集『江戸新道』を出版している。才丸の第一撰集『坂東太郎』は、その翌年（延宝七年）の出版である。このように、芭蕉・言水・才丸の三人は、ほぼ時を同じうして活躍を開始しているわけであるが、その三人の関係がどのようであったかというところは、從來あまりくわしくふれられていない。ただ、三人の関係が密接であり、とくに年若い言水・才丸らが、蕉風樹立の前段階にあつて、芭蕉の先駆者ないし同伴者としての役割をはたした、と説かれてい

る。そのような通説を、いちおう理解しておくことは、もちろん有益である。

しかし、私は非常に素朴な疑問をもつ。それは、たとえば言水についてであるが、彼が『東日記』を出版した翌年（天和二年）に、とつぜん江戸を去って京都に移ることである。延宝六年から四年間、年ごとに新しい撰集を出版し、『東日記』の序で才丸が「これより先三たび句帖を讀はし、三度風脉をかへて三たび古し」と、言水じしんのことばを伝えているとおり、あれほど意欲的な活躍を続けてきた言水が、なぜ江戸を去らねばならなかったのかという疑問である。あとに残った才丸も、六年後の元禄二年に、江戸を去って大阪に移る。このような動きを、どう受けとつたらよいのか。従来の言水・才丸に関する研究も、その点については、ほとんど何も明らかにしていない。けっきょく、私にも現在までのところ、これという結論は見いだせないのであるが、右のような素朴な疑問から出発した私の調査は、しだいに言水・才丸をとりまく背後（幽山派・調和派など）のグループの性格と、それらの勢力関係を明らかにすることの方向にすすんでいった。結果的に見て、言水や才丸が、江戸俳壇という活躍の舞台を、芭蕉一派にゆずつたかたちになることだけは明らかである。

二 言水の撰集活動

さきに述べたとおり、言水は、延宝六年に『江戸新道』を出版して以来、延宝七年『江戸蛇之峠』、延宝八年『江戸弁慶』、延宝九年『東日記』と、年ごとに撰集を出版し、延宝期の江戸俳壇でもっとも注目すべき活躍をした人物の一人である。では、言水のこのような活躍を支えていたものは何か。彼はどのような地盤をもっていたのか。すでに尾形仇氏や今栄藏氏（注1）によって述べられているとおり、言水は、風虎・露沾をパトロンと仰ぐ上方俳人グループ（幽山一派）に属し、風虎の『六百番誹諧発句合』（延宝五年）や幽山の『江戸八百韻』（延宝六年）に参加することができた。とくに幽山一派の結束を意図した『江戸八百韻』に、幽山・来雪・如流・泰徳・一鉄・安昌・青雲とともに言水が加えられたのは、彼がそのグループの中心的人物であったことを示している。同じ延宝六年の『江戸十歌仙』には、言水が、幽山・春澄・泰徳・如流らと巻いた歌仙七巻が入集しているが、この顔ぶれは、京都から下向した春澄を除けば、すべてさきの『江戸八百韻』の連衆であった。言水の江戸移住を延宝六年春とする（注2）、彼はその直後わずか半年で、自撰句集を出版するまでに交際範囲をひろげていることになり、江戸における言水の積極的な活躍ぶりを推測することができる。この問題は、言水の撰集にあらわれる人物を検討することによって、さらに明らかになるであらう。

1 『江戸新道』

まず言水の第一撰集『江戸新道』を見る。延宝六年八月上旬成。中本一冊で、諸家の四季発句二一五句と、言水じしんの独吟歌仙四巻を取めている。発句の作者は全部で一〇三名いるが、そのうち五

句以上の入集者は、次の七名である。

言水一〇句

幽山 九句

露沾 七句

似春 六句

来雪 六句

一鉄 五句

心色 五句

このうち、言水・幽山・来雪・一鉄の四名、さらに四句以下の作者も、青雲四句、如流四句、泰徳三句、安昌二句と、『江戸八百韻』の連衆は、すべてこの『江戸新道』にも顔をそろえている。言水・幽山について七句を入集した露沾は、この年、二十三歳の若殿であり、父風虎にかわってサロンの中心人物となるべき人であった。ちなみに、この『江戸新道』の春部巻頭には「挑灯消せ夕日の名残路の花」という露沾の句がすえられており、さらに同集の夏部・冬部にも露沾の句が第一に掲げられている（秋部の第一は幽山である）。このように見えてくると、延宝六年当時、言水は、露沾・幽山一派と密接な交渉を持つことによって、（あるいはむしろ、上に露沾をいいただき、幽山の傘下におさまることによって）、江戸俳壇の中で安定した立場をとりえたものと考えられる。

2 『江戸蛇之峠』

次に、第二撰集『江戸蛇之峠』を見る。延宝七年五月上旬成。半紙本一冊で、さきの『江戸新道』と同様な編集形式になっている。すなわち、諸家の四季発句三二九句と、言水独吟の百韻歌仙各一巻から成る。発句作者一二七名のうち、五句以上入集する者は次の四名である。

風虎一〇句

幽山一〇句

露沾一〇句

調古一一句

調加 八句

安昌 七句

如蛙 六句

一鉄 五句

如流 五句

泰清 五句

幸順 五句

『江戸八百韻』以来の幽山一派が六人そろって顔を並べているのは

当然として、次に目につくのは、調古・茶瓢軒(調泉)・調加といつた「調」の字のつく一つのグループである。これらは、あとで述べるように、当時江戸俳壇で最も大きな一派を形成していた岸本調和の門人たちである。そして、この「調」の字のつく俳人たちが、言水の撰集に以後しだいに多くなってくる。ということは、言水と調和一派との交渉がしだいに深くなることを意味するのであろう。

(しかし言水は、あくまでも京都貞門系という意識でつながる幽山一派の有力メンバーなのであって、その基本的性格は、江戸貞門の調和一派との交渉が生じたとして、簡単には交わらないであろうことが予想される)。露沾の十二句とともに、風虎の一〇句も注目し価値するものである。風虎・露沾父子や幽山が、言水に対して、有形無形の強力なバック・アップをしていることを示す顕著な現象と見ることが出来る。それに、もうひとつ、句数は少いが云奴の四句をも見おとすわけにはいかない。じつは『江戸蛇之餅』の春部巻頭には、「此朝夢のきれ目や江戸の春」という云奴の句がすえられている。云奴とは但馬豊岡侯京極高住のことで、延宝七年若冠二十歳の青年大名。白石梯三氏のご指摘(注3)のごとく、幽山をとおして言水につながるものである。同集の夏部に幽山を、秋部に露沾を、冬部に風虎を、それぞれ第一に配しているのと思ひあわせてみると、言水が云奴をもまた支援者とならぬであらうことが推測され、言水がこの集を編むにあたって深い配慮をめぐらしている様子がうかがわれるのである。

3 『江戸弁慶』

次に、第三撰集『江戸弁慶』を見る。延宝八年成。現存するのは中本一冊の零本であるが、「発句上」とあるから、なお別に連句又

は付句を取める下巻一冊があったものと推定される(注4)。下巻欠本という不完全なかたちではあるが、今ここに考察の対象とする作者名については、発句の部が完結しているので、支障はない。言水の撰集は、『江戸新道』・『江戸蛇之餅』と、これまで各一冊であったものを、『江戸弁慶』では発句連句とおそらく二冊にわけたので、とうぜん全体の分量がふえたという特徴が見られる。発句の数だけで比較すると、『江戸新道』二一五句、『江戸蛇之餅』三二九句から、一躍『江戸弁慶』六七八句となつてゐるし、作者数も、『江戸新道』一〇三名、『江戸蛇之餅』二二七名から、『江戸弁慶』二四二名へと、ほぼ倍増している。また、五句以上入集した作者の数も、三四名にふえている。

曲言一八句 調古一四句 調泉一三句 如船一二句
 松滴一一句 露章一一句 弥平一〇句 山夕九句
 松陰九句 調鶴九句 露言九句 露沾九句
 幸順八句 黄吻八句 昌夏八句 如流八句
 心色七句 青河子七句 幽山七句 立独七句
 言琴子六句 松嘯六句 泰清六句 調和六句
 云奴五句 可心五句 口蔵五句 松意五句
 水哉五句 正友五句 調味五句 蘆水五句

これらの顔ぶれの中でとくに注目すべきは、集中最高の三六句を数える才丸である。彼は、言水の第一撰集『江戸新道』に「釈西丸」としてただ一句とられただけで、第二撰集『江戸蛇之餅』にはまったく見うけなかつた人物であつた。それが、この『江戸弁慶』にいたつて、撰者の言水よりも多い、集中最高の句数を入集している。このことから、言水と才丸の交渉が、延宝七・八年の間に急速に、

しかも緊密におこなわれたということであろうか。い知ることができ
 である。じつは『江戸弁慶』出版の前年すなわち延宝七年に、才
 丸は処女撰集『坂東太郎』を編集し、その序文を言水に頼み、かつ
 言水の発句二七句を入集したという關係があつたのである（後述31
 頁参照）。すなわち、才丸は『坂東太郎』を、言水は『江戸弁慶』
 をそれぞれ編集し、その過程において二人は密接な交渉をもつた、
 というわけである。（言水撰『江戸蛇之酢』には、才丸の句は一句
 も入集していないから、同書の出版された延宝七年五月上旬には、
 まだ言水・才丸の交渉は深まっていなからう。そうすると、両
 者が交渉を深めた時期は、いきおい延宝七年五月上旬から同年一二
 月下旬『坂東太郎』序までのあいだに絞られてくる）。もともとと言
 水は京都貞門系、才丸は大坂談林系である。このように俳系を異に
 する両者が手を取りあつたのは、彼らがともに大和国の出身である
 ところから、同郷のよしみとしての一体感を持ったからだと考えら
 れる。言水三十歳、才丸二十四歳という若さが、力をあわせて俳諧
 革新の道をすすむことを可能ならしめたものであろう。

4 『東日記』

次に、第四撰集『東日記』を見る。延宝九年六月中旬成。中本二
 冊で、諸家の四季発句八〇〇句と、言水一座の歌仙九卷（うち二卷
 は言水独吟）とを収める。発句の作者二六二名のうち、五句以上の
 入集者は、次の四一七名である。

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 才丸二七句 | 忘水一七句 | 言水三八句 | 其角二八句 |
| 桃青一五句 | 調味一一句 | 言流一五句 | 言弓一五句 |
| 露吸一〇句 | 松滴九句 | 無塩一一句 | 調栄一〇句 |
| 举白八句 | 友静八句 | 弥平九句 | 寒泉八句 |
| | | 露宿八句 | 露草八句 |

- | | | | |
|------|------|------|-------|
| 露沾八句 | 意輪七句 | 云笑七句 | 久巨六句 |
| 言籬六句 | 山夕六句 | 心色六句 | 破枕子六句 |
| 幽山六句 | 立吟六句 | 一静五句 | 吟山五句 |
| 幸順五句 | 工迪五句 | 黄吻五句 | 照流五句 |
| 如船五句 | 政信五句 | 千丁五句 | 蒼席五句 |
| 亭枕五句 | 入齋五句 | 幽水五句 | |

この顔ぶれで目だつのは、三八句の言水じしんに次いで二八句を入
 集した其角、一五句の桃青、八句の举白など、いわゆる芭蕉一派と
 言水との接近である。芭蕉（桃青）は、これまでに『江戸新道』と
 『江戸蛇之酢』に各三句入集していたが、『江戸弁慶』には一句も
 入らず、言水との關係は、はなはだ疎遠なように見えた。しかる
 に、ここ『東日記』にいたつて両者の間が急速に接近したようす
 は、あたかも前年『江戸弁慶』における才丸のごとき現象である。
 其角・举白にいたつては、言水の撰集にこれまで一度もあらわれた
 ことのない名前であった。其角はこの年わずか二十一歳であつた
 が、芭蕉門下の有力な一員として、頭角をあらわしつゝあつた。彼
 は、前年（延宝八年）『桃青門弟独吟廿歌仙』に自作の独吟歌仙一
 卷を発表し、また自句二十五章に芭蕉の判詞を加えて『田舎之句
 合』として出版し、俳人として幸先よい出発をしたばかりであつ
 た。

これらの現象に対して、言水がはじめ力と頼んだ幽山は、年ごと
 に入集句数を減じる傾向にある。これは、言水が幽山から離れてい
 くことを示すものか、あるいは幽山じしんの創作力のおとろえつつ
 あることを示すかの、いずれかであろうと思われる。しかし、幽山
 の入集句数がしだいに減じているとはいへ、つねに六句以上は確保

しているのである。『東日記』には幽山言水雨吟の歌仙一卷があり、そのようなことから見ると、幽山と言水との仲は、交わりなく保たれている。してみると、幽山の創作力がこれ以後、江戸におりたつと見るのが妥当であろう。事実、幽山はこれ以後、江戸におりながら、きわめて影のうすい存在となつてしまふ。なお『江戸八百韻』の連衆は、『東日記』にいたつて、泰徳三句、素堂（来雪）二句、安昌ナシ、一鉄ナシ、如流ナシ、青雲ナシと、まったく精彩を失つてしまふのである。

三 言水の京都移住

言水は、こうして江戸俳壇における幽山の地位をそのまま受けついでかたちで、延宝六年から延宝九（天和元）年までの四年間、江戸俳壇の最も有力な俳人の一人として、活躍するのである。幽山の地盤をうけつぎ（延宝六年）、しだいに調和一派との交渉を深め（同七年）、ついで才丸との緊密な協力体制を固め（同八年）、ついに新興勢力である芭蕉一派に接近する（同九年）。このように、一年ごとにかなりはつきりとした特徴を見せながら、言水の撰集活動は進んでいくわけであるが、その反面、前項で指摘したように、幽山を中心とする『江戸八百韻』の連衆が不振となり、そのことが言水の活躍をかなり制限したようにも見える。

江戸俳壇における言水の表面的な活躍が、あまりに急速かつ花々しかったことにより、言水は、いきおい多くの俳人たちとの交渉を生じたが、彼にとつて最も重要な基盤であるはずの幽山一派の勢力を伸ばすことに、はたしてどれだけの努力をしたのであろうか。思つて、言水は幽山一派の連衆から次第に浮きあがつた姿勢で、自己

の撰集活動を進めていったようである。あるいは逆に考えれば、幽山一派というものが、言水にとつて（たしかに最初の踏み台としては適していたはずであるが）次第に物たりなきを感じさせるようになったのかも知れない。なにしろ幽山派は、調和派などにくらべれば、まだ弱小グループの観をまぬかれない存在であつたから。

こうした不安定な立場にあつた言水に、さらに大きな打撃を与えたのが、後述する内藤家の内紛事件ではなかつたであらうか。

言水が天和二年に京都へ移住した理由として、これまでの研究がどれだけのことを明らかにしているのか、いま私は詳細に知りえない。ただ、次に引く柳田知常氏のご説明（注5）は、私の問題とする点にやや手がかりを与えてくれるものであつた。

（言水は）早くから俳諧に志し、松江重頼の門に入って次第に頭角を現したが、延宝の中頃に至つて談林に化し、その有力な作家の一人となつた。延宝八年、師重頼が七十四歳を以て没するや、言水は京都に上り、以後長く京都に住んだ。

この記述によると、重頼（維舟）の死と、言水の京都移住とが関連あるものとしてとらえられている。しかしこのような見方について、私は二点の疑問をもつ。第一に、重頼の死（延宝八年六月）と言水の京都移住（天和二年三月）との間に横たわる二年という期間が、やや長すぎる。重頼死去のしらせを受けたら、言水はもっと早い時期に上京すべきではないか。それなのに言水はこの期間、江戸で『東日記』の編集に専念しているようである。第二に、言水が京都俳壇で重頼の地盤をうけついで活躍している形跡がみられない。天和二年三月に江戸から京都へ移住した言水は、同年秋には北越および奥羽に赴き、その翌年は西国九州への旅をしている（注6）。

かように京都を留守にして諸国放浪の生活では、重頼の後継者としての役目は果たせない。

言水が江戸を去る一つの要因として、内藤露沾退身の事件を挙げることが出来るのではあるまいか。この事件は、岡田利兵衛氏の研究(注7)にくわしいが、要するに内藤家の内紛である。俳壇のパトロン内藤風虎・露沾父子が不和を生じ、加うるに露沾が、逆臣松賀紫塵の陰謀事件にまきこまれたために、ついに露沾の退身と相成った。このため風虎の文学サロンは活動を停止し、幽山一派とりわけ言水の受けた打撃は大きかったと想像される。この内藤家の事件が天和二年二月であり、言水の京都移住が同年三月であつてみれば、この二つの事件は、~~ほぼ~~まったく無関係とはいきれないであろう。私はもちろん、これだけが言水の京都移住の原因だと主張するものではないが、一試論として提出し、ご批判を願う次第である。

では、こうして江戸を去ったことが、その後の言水の活躍に有利な条件となつたかどうか。京都俳壇において言水の占める位置は、後年たしかに高いものではあつたらう。しかし、かつての江戸での活躍に比べれば、やはりさびしさの影がつきまといつていたように思われる。その点について、轍士の『花見車』(元禄十五年)は、いまのさんやはんじやうを見れば、やはりむさしのつとめがましならんと、ぬしにもたびくうはさ也。

と評している。『花見車』の批評が「著者多年の見聞に基づいて」おり「おおむね的確で」ある(注8)とすれば、言水の立場についてもかなりの真実性を伝えていると思うのである。江戸俳壇という活躍の舞台を捨てた言水の、詩人としての限界は、次に引く杉浦正一郎氏の論文(注9)に、ほぼ尽くされていようであらう。

「彼(言水)は珍らしい程詩人的センスに豊かに恵まれた人であつたので、いち早く談林の只中から蕉風的新風に移りゆくべき運命を感じとつたのであつたが、のち京・南都に帰り住んで上方俳壇の人となつてからは、若き日の情熱も失せたものか、洗練された技巧をもって都会人らしいデリケートな感覚描写に腕の冴えを見せた丈で終つてしまつた。」(二〇六頁)

四 才丸・調和・芭蕉

延宝九年七月、芭蕉(まだ桃青と号しているが)は、其角・才丸・揚水と一座して二百五十韻の作品をつくり、これを『誹諧次韻』と名づけて出版した。これは、同年一月に京都の伊藤信徳らが『誹諧七百五十韻』を出したのに応じたものである。この『誹諧次韻』が蕉風の芽ばえだといわれていることは、周知のとおりである。才丸は、その俳席に連衆の一人として加えられ、これ以後、天和期の数年間、芭蕉・其角らと同じ道を進むようである。天和三年の其角撰『虚栗』に、其角らと一座の歌仙二巻、発句十二が入集したことは、この時期の才丸にとって大きな収穫であつたといえる。しかしそれから数年後、情勢は大きくかわつていくようである。

たとえば貞享四年に出版された『続虚栗』(四年前の『虚栗』と同じく其角の撰集)に、才丸の作品が一句も入集しなかつたという事実が端的に示しているように、貞享期の蕉門の撰集には、すでに才丸の名を、まったく見いだすことができない。では、彼は創作力を失つたのであろうか。しかし蕉門以外の撰集、たとえば調和撰『題林一句』(天和三年)、調和撰『ひとつ星』(貞享二年)、調和撰『白根岳』(貞享二年)、清風撰『稻菰』(貞享二年)、清風

撰『一橋』（貞享三年）、不卜撰『統の原』（元祿元年）などに、才丸の作品を見いだすことができる。これらの撰集がすべて、調和一派あるいはそれに親しい人物によって作られたものであることに注目したい。答はおのずから明らかであろう。芭蕉一派の結束が固まるにつれて、元来よそのものであった才丸は、芭蕉一派から締め出されてしまったものと思われるのである。元祿二年、芭蕉が『奥の細道』の紙に出発したその年に、才丸も江戸を出発して伊勢路に向かう。その年の冬、大阪に帰りついた才丸は、以後およそ五十年間この地に住みついで生涯を終わる。

では、才丸はなぜ、芭蕉一派から締め出されるような羽目になったのか。そのことを明らかにするには、才丸の背後に、調和一派という大きな俳壇勢力が存在したことを考慮しなければならない。江戸俳壇で安心して活躍できる地盤を才丸に与えたのは、じつに岸本調和であった。調和と才丸との関係については、早く荻野清氏（注10）が次のように指摘しておられる。

「本書（注、『坂東太郎』を指す）に入集せる作家の中、廿句以上その作を採録せられたるものを見るに、

- | | | |
|----------|----------|-----------|
| 一、調和四十八句 | 二、露言三十四句 | 三、調。鶴三十三句 |
| 四、才丸三十句 | 五、言水二十七句 | 六、調。泉二十三句 |
| 七、昌夏二十二句 | | |
- （。印は調和系俳人。露言は当時露沾門に帰してゐるが、元來調和の門人である。）

の順となるのである。尙此の外、調和系の俳人はすべて三十名の多きに達してゐるのであつて、此の事実からは、必然的に、本書の編纂が、調和の後援に成つたとの結論が導き出されなければならぬ。即ち、才丸は東下後先づ調和に倚つたのであり、坂東太郎

の上梓は、実に調和及び其の一門の協力に依て、始めて可能だったのである。」

調和の名は、現在なおオポビュラーではないが、延宝・天和期に幽山や芭蕉をはるかにしのぐ江戸俳壇随一の勢力をもつていた人物である。別掲（36頁）の略年譜で見てもわかるように、調和は芭蕉より六歳の年上である。その作品は寛文六・七年のころからあらわれはじめるが、延宝七年（調和四十二歳）に『富士石』を出版し、それによって彼のひきいる一団が、一躍、俳壇の表面に姿をあらわしてくるのである。『富士石』は、中本四冊、四季発句一八八三句を収める。作者三〇六名、そのうちでも、師匠である壺瓢軒調和の名の一字（瓢とか調とか）をいただく門弟が百名になんなんとする隆盛ぶりを示している。

調和が『富士石』を出版した延宝七年には、前述のように、言水の『江戸蛇之群』や、才丸の『坂東太郎』も出版されている。以後、調和は撰集活動に力をいれて、延宝八年に『時鳥十二歌仙』を、その翌年ごろ『俳諧金剛砂』を、天和三年には『題林一句』を、中一年おいて貞享二年には『ひとつ星』を、相ついで出版した。しかし貞享期にはいと、さすがの調和にも、思わぬ障害がおこつてきた。いうまでもなく芭蕉一派の擡頭である。『桃青門弟独吟廿歌仙』とか『俳諧次韻』とか、俳壇の片隅で活動をはじめた芭蕉一派を小癩なりとぐらいにしか思つていなかったであろう調和は、芭蕉一派の、とりわけ其角を中心とする新しい勢力に揺すぶられはじめた。天和三年、其角の『虚栗』が出て『蕉門一派の勢力はもはや、ほとんど江戸俳壇の主流となつた観がある』（注11）というのが現在の定説であるが、調和の勢力も貞享初年までは、たんとか持ちこたえ

ることができたようである。しかし、貞享二年の『ひとつつ星』を最後に、その撰集活動はとどえて、調和じしん俳壇の表面から姿を消し、芭蕉一派にその位置をゆずるのである。

もともと調和一派の力ぞえて江戸俳壇に名をあらわした才丸は、かような事態にどう対処したか。頼みとした調和が没落し、また、ひとたび接近した芭蕉一派からは締め出され、調和・芭蕉のあい対立する二つの勢力のあいだに挟まれて、窮地におちいったであろうことは、想像にかたくない。元禄二年に才丸が大阪へ引きあげた背後には、以上のような事情がからみあっていたものと考ええる。もちろんそのほかに、師の西鶴との関係や、大阪俳壇の情勢からも、さらに検討されなければならぬ。

才丸は、その後およそ五十年間も大阪に住みついて、八十三歳まで生き長らえるのであるが、大阪移住後も、江戸俳壇への未練がなくなつたわけではなかった。芭蕉や其角が世を去つたのち、三度といわず四度までも江戸に下つて俳壇の地固めをしているあたり、才丸がいかに江戸俳壇への執着たちがたい気持をもっていたかを物語っている。『俳諧大辞典』の才麿の項に、荻野清氏が、

江戸へも再三度下つており、ことに享保元年一七二〇から二年にかけての在江は、いわゆる江戸談林の地固めに役立つものであつたと思われる。(同書二四四頁)

と指摘されたのは、まさに卓見であつた。ちなみに、同じく荻野氏の『元禄名家句集』から、才丸の東下についての記事を抄出してみると、次のとおりである。

○元禄十六年(四十八歳)夏、江戸へ下る。○宝永二年(五十

歳)春、江戸へ下る。○宝永六年(五十四歳)春東下し、夏帰阪す。○正徳六年(六十一歳)十月十日過ぐる頃、東下して浅草に仮居す。○享保二年(六十二歳)秋以前、難波へ帰る。

才丸の後日談を述べたついでに、調和のその後についても付言しておきたい。其角が死んだのは宝永四年であるが、その年ただちに調和一派は結束して、江戸座打倒の気がまえを見せる。『つげのまくら』をめぐる有名な論戦である(注12)。江戸蕉門、とりわけ其角(江戸座)に対する調和一派の対抗意識がこれほどまでに根づよく続いていくことは、異常というほかはないが、その対抗意識の原因は、じつに延宝・天和のころに生じたものであつた。

五 おわりに

延宝・天和期をつらぬく江戸俳壇の主流は、言水・才丸・調和・芭蕉・其角らによつて支えられていた。しかし、それぞれの俳人たちは、ときに提携し、ときに離反し、ときに対立した。言水・才丸・芭蕉の関係は、表面的には個人と個人との交渉であり、その様相は顕著に見られたが、いずれもきわめて短期間の、閃光のようであつた。有力俳人相互の提携・離反・対立の緊張関係、それらの背後には、それぞれ性格を異にする一派一派があつて、彼らの活動を大きく規定し、特徴づけていた。そのような俳壇における勢力関係の中で、蕉風が力づく推しすすめられていくのだということを、理解しておかなければならないであろう。

主要俳人对照略年譜

延宝八年	延宝七年	延宝六年	言水	才丸	調和	芭蕉	其角
<p>三十一歳</p> <p>〇〇〇〇〇〇 江戶弁慶 刊行 「江戶弁慶」に三句 「通し馬」に九句 「軒端の独活」に十三句 「向之岡」に四句</p>	<p>三十歳</p> <p>〇〇 江戶蛇之餅 刊行 「富士石」に三句 「坂東太郎」に二十七句 「近來風非抄」に一句 「二葉集」に付句三</p>	<p>二十九歳</p> <p>〇「江戶八百韻」に加わる 〇江戶新道 刊行 〇「江戶十歌仙」に七卷 〇「江戶小路」に九句</p>	<p>二十三歳</p> <p>〇「江戶新道」に一句</p>	<p>四十一歳</p> <p>〇「江戶小路」に九句 十五、付句十六 〇「江戶新道」に三句</p>	<p>三十五歳</p> <p>〇桃青三百韻 刊行 〇「江戶三吟」に百韻三卷 〇「江戶十歌仙」に三卷 〇「十八番発句合」の判詞を書く 〇「江戶小路」に九句 〇「江戶新道」に二十句 〇「江戶通り町」に三句 〇「江戶通り町」に三句 五、付句五、および歌仙一卷</p>	<p>十八歳</p>	
<p>二十五歳</p> <p>〇〇〇〇〇〇 大夫桜 刊行 「通し馬」に九句 「江戶弁慶」に三十六句 「向之岡」に三十四句</p>	<p>二十四歳</p> <p>〇坂東太郎 刊行 〇「河内国名所鑑」八句 〇「富士石」に七句</p>			<p>四十二歳</p> <p>〇富士石 刊行 〇「玉手箱」に十一句 〇「江戶蛇之餅」に二句 〇「近來風非抄」に四十八句 〇「二葉集」に付句一</p>	<p>三十六歳</p> <p>〇「江戶蛇之餅」に三句 〇「玉手箱」に一句 〇「坂東太郎」に三句 〇「二葉集」に付句四</p>	<p>十九歳</p> <p>〇「坂東太郎」に三句</p>	
<p>四十三歳</p> <p>〇時鳥十二歌仙 刊行 (伝本不明) 〇「江戶弁慶」に六句 〇「辨枕」に一句 〇「通し馬」に歌仙一卷</p>	<p>三十七歳</p> <p>〇「向之岡」に九句 〇「桃青門弟独吟」に三句 〇「田舎句合」に常磐屋句合に判詞をかき 〇「深川の庵」に入る</p>	<p>二十歳</p> <p>〇田舎句合 刊行 〇「桃青門弟独吟」に三句 〇「向之岡」に九句 〇「田舎句合」に常磐屋句合に判詞をかき 〇「深川の庵」に入る</p>					

延宝九年 三十二歳
 ○『東日記』刊行
 ○「それ／＼草」
 ○「おくれ双六」に十一句

二十六歳
 ○「東日記」に二十七句
 ○「おくれ双六」に一句
 ○「俳諧次韻」に参加

四十四歳
 ○『俳諧金剛抄』
 この年ごろ刊行
 ○「東日記」に三句
 ○「おくれ双六」に三句

三十八歳
 ○『俳諧次韻』刊行
 ○「東日記」に十五句
 ○「おくれ双六」に一句

二十一歳
 ○「俳諧次韻」に参加
 ○「東日記」に二十八句

天和二年 三十三歳
 ○三月上旬、浴へ移る
 ○『後棟梁』刊行
 ○秋、北窓および良羽に
 赴き、吟あり
 ○「武藏曲」に一句
 ○「松島眺望集」に五句

二十七歳
 ○「武藏曲」に一句
 ○「高名高」に一句
 ○「三ヶ津」に一句
 ○「家土産」に一句
 ○「松島眺望集」に一句
 ○「打曇礎」に一句

四十五歳
 ○「俳諧三ヶ津」に一句

三十九歳
 ○「武藏曲」に六句
 ○十二月、江戸大火。芭
 蕉庵類焼。甲斐へ流寓
 する
 ○「高名集」に「三ヶ津」
 ○「松島眺望集」に各一句

二十二歳
 ○「武藏曲」に発句七

天和三年 三十四歳
 ○歳旦三物帖を出す
 ○早春、西国九州への
 旅に出発
 ○「虚栗」に二句
 ○「空林風葉」に五句

二十八歳
 ○「暗林一句」に四句
 ○「虚栗」に発句十二、
 歌仙三卷
 ○「空林風葉」に一句
 ○「馬蹄二百韻」に一座

四十六歳
 ○『題林一句』刊行

四十歳
 ○歳旦吟
 ○「虚栗」に発句十四と
 歌仙三卷
 ○「虚栗」の跋文を書
 き、新風へのお負を示
 す

二十三歳
 ○「虚栗」刊行
 序文、発句四八、三ツ
 物六、廿五句一、歌仙九
 を入集
 ○「馬蹄二百韻」に一座
 ○「空林風葉」に一句

注1 尾形仂氏「芭蕉とその門流」(昭和三四年七月)岩波講座
 『日本文学史』第十卷所収。今榮藏氏「談林俳諧史」(昭和三
 四年七月)明治書院版『俳句講座』第一卷所収。

注2 今榮藏氏「田代松意」(国語と国文学、昭和三二年四月)に
 よる。荻野清氏「言水」(『俳諧大辞典』昭和三二年七月)は

「延宝四・五年以降」とするが、典拠を明らかにしない。

注3 白石佛三氏「沾徳年譜追考・京極高住の俳諧について」(語
 文研究、昭和三五年九月)。

注4 荻野清氏「江戸弁慶」(『俳諧大辞典』昭和三二年七月)。
 注5 柳田知常氏「言水」(『解釈と鑑賞』昭和三〇年一月)。

注6 荻野清氏『元祿名家句集』(昭和二九年六月)所収の「言水
 略年譜」による。

注7 岡田利兵衛氏「内藤風虎」(国語と国文学、昭昭三二年四月)
 および同氏「内藤風虎・内藤露沾」(昭和三三年一月)

注8 水田紀久氏「花見車」(『俳諧大辞典』昭和三二年七月)

注9 杉浦正一郎氏「俳諧」(昭和三十一年七月)至文堂版『日本文
 学史・近世』所収。

注10 荻野清氏「俳人岸本調和の一生」(国語国文、昭和一〇年四月)。
 なお調和について、この論文から大きな恩恵をうけた。

注11 荻野清氏「芭蕉」（『俳諧大辞典』昭和三二年七月）。

注12 類原基藏氏「続俳諧論戦史」（昭和十一年六月）『俳諧史論

考』所収。および荻野清氏（注10）の論文による。

○本稿は、広島大学国語国文学会（昭和三八年十一月九日）に口頭発表をし、のち若干の加除補正をしたものである。（昭和三八年十一月八日初稿、昭和三九年四月一日再稿）

— 広島大学大学院学生 —